

吾川の古都

026023-000-8

246-13

吾川の古都(安徳天皇の行在所)

伊藤 猛吉/著

M40

ADC-3666



吾川の古都



安徳天皇御
行の所は郡々にあり予は先づ吾

川郡にある者を撰みしも椿山と奥名野川にし

は一寸御立寄遊されしに過ぎず椿

山には古蹟も澤山ありて平家の遺民が一村を

成せし所なれば椿山の事は特筆大書すべき價

値ある者と信じ因て題して吾川の古都とは云

ふ也

一古蹟詮索の事は中々容易ならざる事なり然る

明治
40 11 18
白空

に 英魂愚臣の心を酌み玉ひて僅かに三閱月
にして成れり教育に従事する者等交々予を催
し遠からず 東宮殿下南海御行啓ましますゆ
ゑ此の千歳一遇の時に上梓すべしと因てその
言に従へり
一此書古記録に依る者あり又口碑に依る者あり
時ごしては究理推斷せし者あり以て一篇をな
せり

明治四十年七月

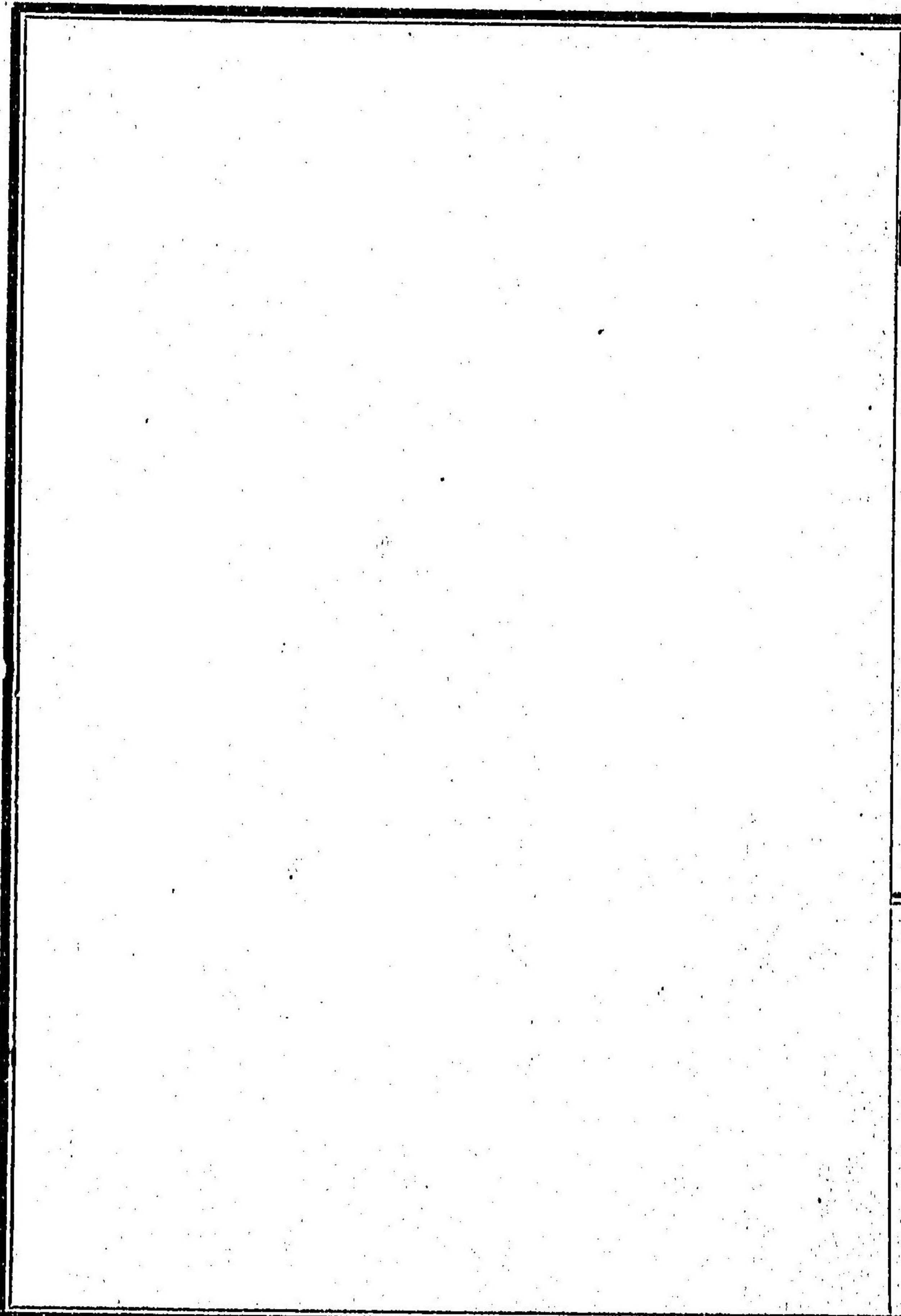
棒山の懷古庵にて

著者しるす

吾川の古都

目次

- 一 棒山行路
- 二 棒山山水
- 三 壇浦敗後安徳天皇
- 四 棒山發見、棒山行在、棒山神社
- 五 棒山村落、棒山風俗、棒山人情、棒山教育
- 六 結論



の安徳天皇
行在所 吾川の古都



土佐 伊藤猛吉著

高知より西行三里を伊野町と曰ふ土佐半紙の出
づる所にして予の郷里なり是より仁淀川を溯れ
ば兩岸山脈對立し愈溯れば愈狭く行程十里にし
て川口に到る川口は諸溪流の仁淀川に集注する
所にして是より始めて舟運を通し三極楮等諸種
の産物を伊野町に積み出すこれ上流諸村の殷富
を致す所以なり予性奇僻あり嘗て野中兼山傳八
録總を著し之を世に廣む而して養和帝の事を夢想

する者久し會々今茲明治四十年五月十七日を以て椿山小學校長に任ぜらる椿山は吾川郡の北部に位し大に歴史を有する村なり予の茲土に行くことを得るも亦奇なり單身里門を出て西行六里にして高岡郡越知町に到る忽ち仰ぎ見る西方に當つて一山屹として高く雲表に拔んで稜威人に迫るを是問はずして其御嶽山たるを知る御嶽山なる者は本名を横倉山と曰ふ又た金壇山壇浦敗後安徳天皇處々に潜行し給ひけるが遂に此の所に永居し給ひて實に御陵のある所なり因て携ふる所の禮服を着し腕きて遙拜し歎じて曰く嗚呼我が

六十餘州一人の義士なく万乗の尊をして此の禍を蒙らせ給ひしかと切齒流涕して山陵を慕ふの念愈切なり然れども行程期あり登謁を得ず遺憾甚し過ぎて回顧し行くこと四里にして川口に到る前に過ぐる所みな國道にして是より右折細流を溯り郡道を行くこと二里許にして山間の小都會あり之を池川郷土居と曰ふ池川役場の所在地にして稍繁華なり是より里半を永代と曰ふ雲橋あり予路人に問ふて曰く椿山路如何路人の曰く橋を渡り右折山に登るべし曰く行程幾許里ぞ曰く里半予勇を鼓して登る路險隘にして石稜

足を嚙む右に溪流あり遙の下にあり登ること愈甚しうして路愈遠し此の日候計甚た低しと雖も發汗脊を濡し氣息喘々たり然れども一滴水なく渴甚し殆んど碧蹄館飲濁の思あり屈せずして登れば遙の向ふに山小屋あり予これを樂む到れは人なし因て高聲小屋主を呼ふ山彦應じて人聲更になし頻りに呼ふ唇かわき聲かるゝに至つて山翁遙の空より微かに應じて曰く小屋の中茶あり憩ふべしと予喜び極つて躍り入り引くこと數椀味美酒より甘く氣忽ち爽かに汗忽ちかわき聲忽ち出で勇氣凜然たり因て山上の翁に禮を放つ

て去り又登る路至つて峻なり前途亦幾層の高きを慮る既に登ること十數町地稍夷にして大師堂あり意やゝ安んず予進んで拜して曰く不肖某椿山教育の命を帯びて行くの途なり伏して願くは冥護を垂れ素願を全からしめよと言ひ畢つて小憩し又行くこと數町にして路左折す是に於て北望すれば遙の前一溪水を隔て左に人家稠密し右に巖山高く雲表に秀で又數十丈の瀑布の懸れるあり始めて氣を壯快ならしめたり踴躍して行くこと三町許にして漸く椿山村落に達するを得たり

二 椿山々水

吾川の地南北二十里南は海に瀕し北に進むに随ひ地勢愈高し椿山は郡の極北にあり伊豫と境を交へ加ふるに四國一たる石槌山脈を受け地位極めて高し予が郷に在るの時雲宵を貫きたる諸高峰も今は培塿の状を呈せり當地の山悉く巖崖にして樹木茂生し岩窟多し一小川あり前鞍川と曰ふ川を隔て東を東椿山と西を西椿山とす椿山の在所は西椿山にあり家々山に倚りて建設し総て四十五戸而して予が命を受くる所の椿山小學校も亦其中にあり前鞍川を隔て東に當つて巖崖

山をなし屹然として高く雲表に聳へ樅栂の大樹茂生し点々巖状を形はす而して一長瀑その中間を直鑿す其山峰分かれて二つとなり一山その後に挟まり小山又其後を圍めるが如し其間に岩窟あり然れども遙かの空にして樹木茂生し人をこて窺ふべからざらしむるのみならず又山上には平地ありと曰ふも正面より之を見れば鋭くしてあるべき理なし瀑甚た高く平時は水なしと雖も雨毎に他の諸瀑と共に瀉下す此の山甚だ靈あり之を略述すれば煙霧山麓より起るあり山腹より出づるあり山頂より上るあり處々より煙の如く

斷々乎とて吐き出すあり忽ちにして消る忽ちにして出で或は濃く或は薄く空に向ひて馳する者あり麓に向ひて落つる者あり左する者あり右する者あり八方に散する者あり一方に集まる者あり散しては全形を著し集つては全形を失ふ小雨は全山の簾をなし大雨は簾のまゝ左右に向つて歩み瀑水は鞆とて千尺の白布を下すが如く晴るれば大陽これを照し皎々として雪の如く綿の如し百鳥は轉々として美音を傳る溪流は響ひて彈琴となり日月は奇山の巔に出で、赫々皎々として村落を照し千變万化端倪すべからず抑

これ造物者の妙か將た何物の 聖靈これを爲すか予頗むるその寄々妙々たるに驚く因て村人に訪ふて曰くこれ何の山か曰く國王山なりと予曰く宜なる哉その奇瑞を顯すやと是に於て毎朝禮服して脆き此の山を拜し奉る一山又その後方を南に走れりこれ石槌山の脈にして長尾山と曰ふ長尾山の脈支出し大樽山となる山に大瀑布あり巉岩層々として高さ四百八十餘丈遙かの空なる蒼々たる林間より白水を吐き連綿として瀉下し谷に落つ一長布を懸くるか如く石に激せられ飛散し雪花となり聚雨となり餘勢迂回徐々として

前鞍川に入る西椿山の南部又は山腹より眺むれば景色佳なりと雖も椿山神社よりの眺望至つて佳なり午后に近づき觀れば大陽瀑水に映して五色景をなし頗むる奇麗なり因て五色の瀑と曰ふ又其側の巖石も五色を帯へり五色の瀑より南なるドオゲと曰へる所に鏡の瀧あり盛夏の候は草木茂り之を覆ひて見へざるも秋冬の候に到れば瀑水三尺四面銀色燦爛として鏡の如し因て鏡の瀧の稱あり是大陽瀑水を照し反射するが爲めなり又惠美須の瀧と曰へる者あり國王山の後に當り巖崖高く聳へ其中腹の窪みたる所に惠美須体

の者二個並へり往年人ありこれを毀ちしも間もなく再生せるを以て村民これを奇瑞とせり抑も瀑の世に聞ゆる者布引あり音羽あり其大都に近きを以て名四方に顯はる往昔は齊藤拙堂翁布引瀑を見てこれを記す予や少時足跡未だ郷里を出でざるの時翁の文を見て始めて其奇勝を知るを得たり椿山は實に天下の奇山なり椿山の山水をして三都附近にあらしめば文人墨客の遊ぶ者日に絶えざるべし而して此の僻遠の地にあるを以て遊屐到る者なし物幸不幸ある此の如し豈慨歎に堪る

ざる可けんや然りと雖も椿山の山水が文人墨客の遊觀場たらざる是れ椿山が天下の奇山たる所以なり世或は椿山を以て大山分なりと卑下する者あるは平安山水の趣味を解せざる山童野叟の看に等しくして亦論ずるに足らざるなり

三 壇浦敗後安徳天皇

壇浦の戦 皇軍その支ふ可からざるを悟り智盛諸將と謀り田口成能をして詐りて源氏に降らしめ其間に 帝を奉して成能の領土なる阿波の國へ遁れたり阿波國は成能か源氏より與へられし國なれば 帝及平族は成能の誘導に依り壽永四

年三月二十八日三好郡山城谷粟山の山中に潜み給ひしも源氏が追捕使を迫り平氏の餘徒を詮索すること急なりしかば成能の氣附にて全國美馬郡東祖谷山に移り尋て土佐國香美郡韭生郷久保村西熊山に移り此處に居給ひしが又全郡榎山村川内村の山筋に移り尋て土佐と伊豫との國境の岩洞中に匿れ給ひ夫より土佐郡本川郷戸中村を経て吾川郡池川郷椿山村即ち當村に移り深林幽谷の間に居給ふこと三年なりき而して嚮きに述べたる所の靈妙不思議にして高く雲表に聳ゆる國王山は實に是れ 帝の潜幸し給ひし時の舊跡に

して蓋し 帝魂永く此邊に遊び給へるならむ是
予か毎朝禮拜する所以なり夫れ七百年の昔椿山
が山高く樹繁く岩窟多くして人跡なく人間界に
あらずして禽獸界を爲し文人墨客の來る者なき
か爲め王人の都となり今は郡中第一の舊跡を占
むるに至れり予毎日
國王山より日月の出づるを拜する毎に山名の起
る以所に感ぜずんばあらざるなり
國王山ほ前鞍川より起り巍峨たる絶崖にして人
間の登るを得べき山にあらず時々雲霧これを包
み全く形を失ふ 帝この妙靈の山中に永く匿れ

給ひて 玉体を全ふせられしは抑も 日の御神
の御徳が尙これにて 高祖高千穂時代の御事を
も想象し奉れり

四 椿山發見、椿山行在、椿山神社

帝の本川に停り給ふや平氏の族瀧本軸之進を御
膝近かく召され深山幽谷を探らしむ軸之進勅を
奉じ山間を拔涉して此の地に到りしに山高く樹
木鬱茂して人跡なし之に加ふに山の大空に岩窟
多く以て 玉体を迎ゑ奉りて守護すべく又山水
至つて美にして川魚の潑刺なる者多し以て供御
して 帝の御英氣を養はせらるに適せりとなし

因て急き歸り情を奏す帝軸之進の忠節を嘉みしこれを嚮導とし知盛教經教盛時子^{二位}及ひ乳母虎岡^姫等八十餘人を従へ此地に移り給ひて國王山上なる王^ワ人の址と稱する當地の人は商人をアキヒトと云ふ所に行宮を造させられオモゴヤ、邸が地以上國主を山にあり經營し近習の人々をして住ましめ又諸將には各邸宅を賜ひたり上邸中邸西邸飯場西小路以上西椿山にあり等はこれ其址なり蓋國王山には人を少なくし多數の面々をば西椿山に居らしめたり

帝頗むる武術に御志厚く鍛冶を置き馬を養ひ射撃を習はしめたりカヂヤガ谷、コマドチ、弓場等は

その址なり弓場は西椿山にあり世々軸之進の子孫の住みし所にして其傍に瀧本神社あり軸之進の墳墓に就きて社壇を設けたる者にして村民は之を椿山の太先祖と爲せり又軸之進か屋敷の遙かの空なる山上に王助と曰へる所ありて此所に洞穴あり樹木蒼々として之を疵へり是又緩急ある時 玉躰をかくまひ奉るに適せり其深奥計るべからず椿山の地古は要害なるのみならず土肥る米粟黍稗豆等に適せるゆる御安楮にましますここ三ヶ年の間なりしが一日川下の者大路をたどりたどり遙々と登り來りて軸之進が家に詣り

日けるやう此の山奥には人家なしと思ひしに過
 日の大水に椀流れ下りしゆゑ尋ね來りたり子等
 何の年より此の地に住みしかと 當時池川郷には人家なく
池川の始椿山なりと曰ふ 軸
 之進の曰ひけるやう吾れは獵師なるが三年前に
 路を迷ひて深く此の山中に入りこみ今に住み居
 れりご答へ川下の有様など猥なく尋ね厚く禮し
 て去らしめたり 或は曰ふこれを降らしめば潜幸の事願はれんとて後より追つ
 駈け不依が谷と曰へる所に於て之を殺し聖を祟めて其後を弔
 ひたり今の氏佛堂に祭れる若
 佛と曰ふはこの聖の事なりと 是に於て知盛等これを危しこな
 し御嶽山の方へ落ち行き給ほんことを請へり 椿山
 上より御嶽山
 を一望す 帝これを聽し給ふ然れども悉く移轉す
 るは却て人の疑を索むる基なればとて軸之進の

忠節を思ひこれを此の地に止め鎧と寶刀を賜ひ
 て後事を嘱したり其子孫世々此地に居り數家に
 分れ即ち瀧本、山中、峯本、中内、以上各
 六戸 平野、以上各
 五戸 西平、以上各
 四戸 半場、以上各
 三戸 中西、中平、野地、梅木、以上各
 二戸 南戸の十二姓となりしが
 村民は皆その裔なりと曰へり故に鎧と刀とは瀧
 本家の寶物なりしが數代を経しに瀧本家は衰微
 し山中家は其分家にして富有なりしゆゑ鎧及び
 プンブクの茶釜と共に典したりしに何時しか山
 中家の寶物となりしが後山中家も衰微し茶釜は
 その黄金製なることを知らずして高知の商人に
 賣り商人は之を東京に上ばせて某家の重器とな

り刀は池川郷大西村の某家に移りて秘藏せり
曰ふ 刀元大小一腰にして是れ大刀なり小刀は山中の分家に傳はれり精氣人に崇り家主と雖も窺ひ見る能はずといふ 嗚呼吾れ椿山の爲めに此の寶物を惜しむ椿山の神や寶物去る
と雖も人心の離れざらんことを祈るなり

帝現に御嶽山に移らせられ 椿山を出で奥名野川に到り給ひしに義住の舊臣居りしを以て別府に移り夫より御嶽山に移り給へり 正治二年八月八日崩御し給ひ御壽二十三

山上の鞠岡に葬れり今の御陵是なり 帝崩する

に及んで白鳥あり御嶽山の方より飛び來り王助

の洞穴に入りたり因て村人小宮を建て 帝を祭

り奉りしが後これをカミヤ一ゼ 古宮に遷し 帝及

び知盛教經教盛時子 二位 虎岡 帝の乳母 軸之進の七人を

虎岡姫

合せて大元七社の權現として祭りたり大元とは
此の七人か椿山を始むるの意なり今の椿山神社
是なり後これを今の所に遷せり曰ふ地高燥に
じて樹木繁茂し蒼翠染むるが如く空氣至つて清
良にして社殿結構壯麗驚くべし祭時には近郷の
宮司相集りて神樂の舞を奏し祭典嚴盛なり曰
へり又其社傍に瀧の宮あり是熊野の神を祭れり
熊野の神は平家の信仰する所なればなり

五 椿山村落、椿山風俗、椿山人情、椿山教育

椿山村治

椿山は今人家四十五戸 人口二百三十 あり前鞍川と曰へる

一小川を隔て、國王山に向へり家々山を脊にし
て上より下へ段々に建て並べ一團村落をなせり
村池川役場の所轄に屬すれども遠隔ゆる區長を
置けり其下に四人の議員と稱する者ありて小事
は區長議員に決し大事は村民に謀る而して如何
なる大事と雖も立ちに定まらざることなし家々
みな木造にして壁なく板を以て圍めり屋上は樹
を割りて厚板を製し之にて覆ひ其上に横木を置
き繋ぐに藤蔓を以てし横木の上には大石を置き
て鎮壓せりこれ 帝の潜幸し給ひし時の有様を
存せし者にして如何にも當時を想像するに足れ

り又國王山上に邸宅の趾とて「オモゴヤ」と稱する
所あり其コヤト稱するも當時の状況として左も
あるべき事なり然れども近年追ひ追ひ瓦葺に改
め居れり古來我が土佐にては山分の家は大概田
舎間にして幅九尺に戸三枚を入れたるを常とす
れども椿山に至りては家毎に本間にして幅九尺
に戸四枚を入れ尙ほ雪隠の如きも引戸となせり
是れ往昔京都宮邸の制を引用せしに因れるなら
む又座するに公家膝を以てせり男子は平生「たち
つけ」の如き服を下部に着けしが是古の公人又は
戦時の服の如し又家主に最も權利あり家属は家

主の命を受くるにあらざれば聊の事をも行はず
皆家主を重んじ一家親密にして公家の遺法残れ
り此の村近年まで他村と交通を庶断し嫁娶も村
内に於てせしゆる皆軸之進の純然たる血統にし
て悪疾の系とては一人もなきゆる婚家を撰むこ
か儀式を廣大にするとかの煩なかりしも其弊害
の及ぼす所は軸之進時代は名族の習慣ありて禮
儀も正しく言語も雅にして學問もありしが外交
を禁すると共に一家内中の事とて他に耻づる者
なきゆる禮儀とか言語とかも何時となく野卑に
流れ且つ文字を用ひて筆記する程の事柄もなく

して農事一方にのみ勤めけるか現今に於ても尙
ほ他村と婚を交ゆるを耻づる風あり家内一同一
無盡に業を勵みて朝は早く起き晩は夜に入りて
歸り行く時に魚竿を携へ歸る時は薪を貢ふ又耕
す所の山遠ければ家を閉ち置き一同行き十餘日
も歸らざるも盜賊の患なし斯の如くして寸時も
業を休むとなし是に伴ひて兒童は入學せしめて
一日も休まじめず田舎の風習として五節旬には
舉家業を休む者なるに此の村に於ては休まず休
むは唯三大祝日にして此の日は家々日章旗をか
ゝげ學校に集ひて祝賀式をなし杯酒を交ゆるを

例となせり又椿山神社の祭日には池川の庄田の美酒玉笹を家毎に幾丁も購求し村々の人を案内し經二寸五分以上の大杯にて三四日も連飲すといふ其他氏佛の祭日と瀧本神社の祭日とにして氏佛と曰ふは軸之進が持ち來りし瀧本氏の先祖を堂に祭れる者にして堂内に御室あり意匠彫刻共精巧にして至つて古し盆には擧家業を休みて堂に集り手厚く祭をなすといふ其外村中の家の慶び事等には村民相會し和氣藹々の中に歡飲夜を徹すといふ一村至つて睦ましく一家事あれば擧家行きて之を助け又嘗て爭論せしことなし實に美風なり若し或は酔ひて怒る者あ

れば相集りて慰め懇情至らざるなし村落の山を越ゆれば伊豫分なり昨年その伊豫山八十餘町を賣り込む者あり一村協議して之を貳千五百圓に買ひ共有となせり現に椿山の地未だ耕さざる所多しと雖も將來を慮りて此の山を買ひたるは賢しこれを見るも一村睦ましくして事の一致し易きこと知るべし此村は三極に適すと雖も其實立金は貯蓄し其他の産物を以て活計をなすに足れりといふ故に品物の代金は借り置きて盆と暮に潔く拂ふを快とせり實に近郷に稀なる富村なるゆる僻遠の地なれども近年商人處々方々より入

り込み多く貸し附けて歸るを競争せり然れども
少なくとも二三度來らざれば始めて來る者の品は
安價にても買はず然れども懼れ合ひたれば頗む
る情義の厚き所なり概言すれば當村は言語風俗
自から他村と異なり古は別に一國をなせし者の
如しと曰ふも可なり土佐にては安藝香美長岡土
佐吾川高岡の六郡は一なれども幡多の一郡は言
語風俗自から他村と異りしも椿山に至つては又
別種なり之を以て考ふれば禁交の影響實に大な
りと謂ふへし予幼時頼山陽翁の日本外史を讀む
曰く肥後五家山は平氏の遺民にして今尙他村と

交通せずと予頗むる其事を疑ふ今椿山に來るに
及んで能く翁の文句を解譯するを得たり翁をし
て今尙ほあらしめは予の不文を待たずして可な
り遺憾も亦甚だし

五 結論

帝八歳の御時より常に山間に潛み給ひしを以て
至つて御不自由なりしならん誠に恐れ多きこと
なり故に予は椿山に來るに及んで村人に向ひ山
間ゆゑ難儀ならんと言ふ勿れと戒めたり 帝椿
山に移り給ひしに及んで此の地は深山幽僻なれ
ば御難議も多かりし程に思ひ奉れども其甲斐あ

りて外人の來ることなかりければ其御心配は少
なかりしならむ 帝王の尊き所以の者は 天照
大御神の御掟なる神器のある所にして神器を有
せざる者は帝王と曰ふべからず故に神器を有す
るの人に對しては何人と雖も犯すべからず清
盛の暴戾を以てすら王人に敵せず其意に曰く法
皇は何者ぞや大權は素より天子にあり何ぞ之を
妨ぐることをなすこと幽し奉れり素より皇裔に
對し無道を爲すの罪免かれずと雖も頼朝か正統
の天子を苦め奉り表はに新帝を尊ひて其實は先
王の大權と王土とを攘むに至つて其罪重且つ大

にして臣子の分にあらざるなり凡そ人富貴の時
は交厚く禍に逢ひて亂るゝ者なるに平氏に於て
は進屈谷まるの時に當つて敵の和議を容れず正
統の天子茲にあり弓をゆるべて來り降るべしと
是豈に王權を辱かしめざる者と謂ふべし其戰敗
るゝや一族潔よく死すべくして天子あり未だ死
すべからず一族心を協つて山谷無人の地を經歷
して王人を守り時を待つこと十有六年の久しき
是れ誠忠にあらずして何ぞ能く此の如くならむ
や夫れ頼朝は大御神の定め給ひし神器を持たざ
る天子に仕へ其上先王の大權と王土とを攘み以

て骨肉相食むこれを平氏一門が心を協へて王事に勤むるに比すれば其得失如何ぞや然るに世人は平氏を以て不忠不義の人となす是甚だ誤れり此時平氏敗れ源氏全盛を極めたるを以て平氏は不忠不義の名を蒙りしと雖も之に反して平氏大勝を得て源氏敗北したる時は頼朝は流人の餘唯に不忠不義のみならず其罪至つて大なり然るに幸に義仲の暴横に會し比較的善人となりたりと雖も是れ素好言令色の徒にして其罪平氏に數倍せり予因て平氏の忠誠に感じて帝の不幸を憐み奉るなり聊か記して成敗を以て事を論ずる

者を戒しむと云爾

土佐の地たるや古は罪人を佐くるの國なり故に土佐と書し皇族公家の此國に近る者甚だ多し唯帝御壽短くして源氏の衰運と皇家の先權を見玉ふこと能はず是素より積年御憂奮の致す所か將た山間に居給ひし故攝養其當を得させ給はざるが誠に御憐の至なり夫れ猜や帝をして何ぞ一度都の御夢を見せしめ奉らざる其三代にして滅ふる理なきにあらざるなり予濤山に来るに及んで村民平氏の落人と曰はるるを耻づるを見る唯その平家の落人たることを知つて高祖か帝に

供奉して此の地に來りしことを知らず況んや帝
の行宮の址をや予こゝを以て一身を犠牲に供し
頻りに古跡を詮索すこ雖も久しく外人と交は
らず事を秘密にせし結果として湮晦して著れず
然るに予の此地に來る所以の者は素より教育の
責任ありと雖も一天万乗の御君の居ませし
御址を探らんか爲なり而して如何に詮索するも
得ず予從來古蹟を詮索して未だ曾て發見せざる
ことなかりしに此の御址に至りては甚だ窮せ
り既にして又奮つて曰く此地行宮の址必ずあ
るべし精神一到何事がならざらんこ又探ること

累日漸く國王山の名稱を得心稍嬉しと雖も山
絶崖にして宮殿の有るべがらざるが如し因て村
人に問ふて曰く山上平地にして屋敷となるべき
所ありや村人の曰くなしと予獨り固く執つてあ
りとなす又一心不乱に探究すること累日はに於
てワウヒトノアト、オモゴヤ、ヤシキガチ、ワウタシ
等の名稱を得たり而して土人は其由來を知らず
王人の址は大人の足跡なりと思ひ其行在のあり
しことを知らず予は此の名稱を得るに及んで心
頗むる喜ぶ然れども未だ發表せず故に人之を知
らず一日村人の來る者あり予に謂つて曰く前校

長岡本君は魚を釣つて樂めり先生も亦何ぞ釣を垂れて以て伊藤が淵の古跡を止めざる予笑つて曰く予は釣を好まず唯椿山の地を掘つて以て大なる者を得ん予するのみ予曰く銅か曰く否な曰く銀か曰く否曰く金か予曰く暫く待て將さに得て以て子に示さん予彼諾して去る既に數日にして又來る予喜んで答へて曰く獲たり獲たり國王山是なりと村人の曰くそれ何ぞ大なるや曰く國王山なる者は國王の住み給ひし山にして實に

安徳天皇の行在所のありし所なり故に此の山は

椿山の寶にして椿山は天下の名所舊跡に例するのみならず實に天下の寶と謂つべし豈大ならざらんやと村人形を正ふして曰く實に先生の言の如し先生にあらずんは誰か能く之を得ん先生の賜亦大なりと謂ふべし予曰く否なこれ 聖靈愚臣の微志を憫み給ひて指導せらるゝに因れり予の功にあらざるなりと村人莞爾とし禮揖して去る椿山の大元祖を軸之進と曰ふ 帝の御爲めに力を悉し武者と賞せらる因て此の地椿山の稱あり村民は皆その裔なり村は皆その一家なり一門なり一族なり其相睦ましき亦宜なり一家を以

て一村を爲す實に世に稀なる所なり唯その久しく國王山王人の址大元七社に氣附く能はずして徒に自から平氏の遺民たるを耻づ予甚た之を惜めり椿山の民たる者唯その名家の子孫たることを体し風俗を化し言語を正し行路を廣め貿易を盛にせば一村の進歩する他村の及ぶ所にあらずるなり椿山の民は由來恪勤にして儉約これに加ふるに土地三極に適し地廣くして餘わり其上八十餘町の伊豫山あり又銅鑛あり石槌山の通路に當り將來の盛運期して待つべし夫れ椿山の民及び教育に従事する者はこゝに留意して一村の開

明を計らんごを切望して止まざるなり予か少時香美郡にある時數々 土御門帝の行在所たりし姫倉月見山に登りて 帝魂を吊ひ奉れり長して職を徳王子校に奉ずるに及んで生徒を卒ひて登謁す時に 帝の愛賞し給ひて御心を慰められし延命松も伐採の數に加はりしかは慘然として馳せ歸り人をして之を山主に諭さしむ山主これに服し伐採を止めたり予喜ひ極れり後吾川郡に移るに及んで久しく登謁を缺く會々友人の香美より來る者あり予一禮にも及ばずして先づ延命松を問ふ友人の曰く既に風致林に加へられ禁伐

の行在所
となれり予大聲掌を拍つて曰く子や好土産を
齊せりと因て酒を温め引滿献酬夜を徹す今椿山
に来るに及んで國王山を仰望して其風致天下に
並なきのみならず一天万乗の君主の行在所た
るを思へは姫倉山と同一なり椿山の村民たる者
これを風致林に申請するの義務を有せり夫れ村
民や何ぞ早くこれをなし天皇の行在所の古跡
を保護して以て椿山の体面を保たざる嗚呼椿山
は平氏の遺民にして他村と交通せず且つ又他村
の如く古跡を作爲する事なく都と曰はす王人の
址と曰ひ邸と曰はずコヤと曰ふ予その帝京たる

の眞を置くあり因て御嶽山と關聯してこれを述
ぶと云爾

吾川の古都終

明治四十年十一月五日印刷
明治四十年十一月十一日發行

高知縣香川郡伊野町百五拾九番屋敷

著作兼
發行人 伊藤猛吉

高知縣高知市本町百四番屋敷

印刷人 小谷正儀

高知縣高知市本町百五番屋敷

印刷所 高知活版印刷所

(電話五六番)

高知縣高知市種崎町四拾六番屋敷

賣捌所 澤本駒吉

(電話五四番)

246
13

不許
複製

246
13

